

# スクール・エンパワーメント推進事業 (学校図書館を充実・活用するためのモデル小学校)

大阪府 高石市立取石小学校

## 基本データ

所在地	高石市取石3丁目14-23
児童生徒数	512人
教職員数	34人
蔵書数	6,985冊
年間貸出冊数	15,755冊

## テーマ・活動のねらい等

【テーマ】授業改善、教員による利活用の推進

【活動のねらい】

- 高石市立取石小学校では、全国学力・学習状況調査等の結果から、児童の読解力や表現力における課題や、読書の習慣が少ない児童が多数いるという課題が明らかとなった。
- 児童が本に親しむ機会を増やすとともに、問題の意図を読み取り自分の考えを書くことができるようにするなど、児童の言語能力を育成することをめざしている。

## 取組・活動の概要

- 大阪府では、小学校12校に府独自で学校図書館担当教員を配置し、学校図書館の機能や図書資料等を有効に活用した授業を研究し、言語能力の育成に向けた実践事例を府域へ発信する取組みを進めている。
- この事業実施校では、子どもたちが本に親しむ機会を増やすこと、学校図書館を活用した授業を充実させること、学校図書館の充実に向けた環境整備を行うこと、の大きく3つの取組みを通して言語能力の育成をめざしている。
- 学校図書館を活用して、子どもたちにつけたい力を明確にした授業づくりを全学年・全ての教科で意識して、学校全体で取組みを進めているところである。
- 事業実施校の1つである取石小学校では、学校図書館担当教員を中心に学校図書館の環境整備を行うとともに、学校全体で系統的に学校図書館を活用した各教科の授業づくりに取り組んでいる。
- 具体的には、主体的・対話的で深い学びのある授業づくりに向けて、学校図書館全体計画に基づき全学年の学級担任が学校図書館担当教員や学校司書と連携して、月に1～3単元で学校図書館や公立図書館の蔵書、コンピュータ及びタブレット端末を活用した調べ学習や並行読書などに取り組んでいる。

- また外部講師を招聘し、指導案や授業の発問の仕方等の指導助言を受け、教職員が一体となって学校図書館を活用して言語能力を高めるための授業力の向上に取り組んでいる。

## 取組・活動の工夫や特徴

- 取石小学校では、ねらいの達成に向けて、これまでも書く力を育成するための取組みを継続して行ってきたが、資料をもとに相手にわかりやすく伝えたり紹介したりする言語活動をさらに授業で取り入れた。
- あわせて、多くの図書に触れ、描写や表現の仕方を学ぶ活動や、要約する活動を通して語彙数を増やすように工夫した。
- また、授業の中で学校図書館の図書や資料などを活用する機会を増やし、学習を深めたり、探究的な学習を行ったりすることができるように、これまでの読書センターとしての役割とともに、学校図書館が情報センターや学習センターとしてより機能するよう努めた。

## 取組・活動の成果や今後の展望

- 取石小学校では、国語科での並行読書に加えて、図画工作科や総合的な学習の時間等で教科横断的に取組みを進めた結果、読書感想画や本の帯等、学習の成果物から、児童の学びがこれまでより深まってきている。

単元名 ～読んだ感想を「思いのとびら」で伝え合おう～  
**ごんぎつね**  
教科書出版社名（光村図書）

○ 小学校（4）年 教科等（国語）  
 ○ 「自ら学ぶ子どもの育成」に向けて、この単元で付けたい力

・文章を読んで、考えたことを発表し合い、互いに考えの共通点と相違点に着目して話し合うことにより、一人ひとりの感じ方の違いに気づくことができる力をつけたい。また、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読み、感想や考えを持ち、それらを「思いのとびら」としてショーウィンドウ形式でまとめることができる力をつけたい。

○ 学校図書館活用のポイント

・今回の授業では、ごんぎつねと似た内容の図書を活用・紹介する。補助教材として扱うのは「近い赤鬼」、「おこじょうり」、「おにたのぼうし」の3冊である。「周囲に理解されない主人公の境遇」「主人公他の人物の関係が密接である」「主人公の伝えたい思いが相手に届いていない」という3観点が、ごんぎつねと類似していることから、この3冊を選んだ。3冊を紹介し、ごんぎつねの学習をしながら並行読書として、活用をめざす。

○ 学習の展開（全14時間）

第1次	① 単元のめあてを知り学習を見通す。 「ごんぎつね」を読み、初発の感想を書く。 補助教材を紹介する。 ② 学習計画をたてる。
第2次	③ 「1」の場面の様子に着目して、想像を広げながら読む。物語の設定やごんの性格、書かれている状況などを確認する。ごんの行動や気持ちについて考える。「思いのとびら」の「ごんの紹介コーナー」を書く。 ④ 「1」と「2」の場面の様子に着目して、ごんと兵十の関係をとらえる。「思いのとびら」の「兵十の紹介コーナー」を書く。 ⑤ ⑥⑦⑧⑨ 「2」「3」「4」「5」の場面の様子に着目して、ごんの行動と気持ちの変化を読み、変化がわかる文にしるしを付けて、簡単にまとめる。 ⑩ 「6」の場面の様子に着目して、ごんと兵十の気持ちを考える。 ⑪ 「6」の場面を、ごんの視点でリライトする。
第3次	⑫ 「心に書いた一文」を300字程度に書きまとめる。書いたものを推敲する。 ⑬ 書いたものをもう一度推敲し、「心に書いた一文」を300字程度で消書きする。 ⑭ 友だちが書いた「思いのとびら」を読み合い、よかったところや感じたことを伝え合う。

※「1」～「6」は教科書の場面分けである。

○ 本単元における成果と課題

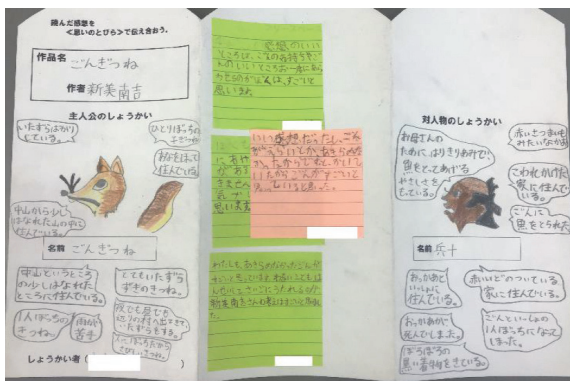
① 成果	今回は授業の最終目標である、単元を通してつけたい力を具体化した成果物の作成に重きを置いた。ごんぎつねやその他補助教材を活用し、主人公の思いや隠された心情を想像し、それらを「思いのとびら」としてショーウィンドウ形式のシートを作成することができた。
② 課題	友たちと交流し、様々な文に触れることで、書き方の参考にできたが、心情描写や情景描写など、書かれていない部分を想像するのは、まだ難しい様子であった。また、文章を書くことに対して難しさを感じる児童が数名いた。
③ 児童の かえり	・学習計画をみんなで立ててみることで、今後の学習や今日学ぶことがわかったので、安んじて学習することができた。 ・「思いのとびら」を作るのは初めてだったが、みんなから色々な意見や感想を付箋に書いてもらって嬉しかった。 ・友たちが自分と同じところの感想を書いてくれたけど、考え方や表現がいろいろ違っていたので、こんな書き方もあると思った。

○ 学校図書館を活用した際に注意した点や学習の中で工夫した点について

本校では学校図書館活用の授業に関して、様々な学習形態を研究している途中である。今回の授業においては、①単元を通してつけたい力を明確にした学習計画の作成 ②学校図書館を活用した並行読書、その他教材を活用した授業作成 ③単元を通してつけたい力を具体化した成果物の作成の3観点を重きを置いて、学習を進めた。学校図書館担当として、授業で活用する補助教材の選定及び、児童への紹介活動や成果物の作成など、外部講師からの指導を仰ぎながら研究を進めた。補助教材については、各教室に数冊展示する必要もあり、学校司書と連携し市立図書館からの貸し出しも行った。

「思いのとびら」作成に関しては、互いに考えの共通点と相違点に着目して話し合うことにより、一人ひとりの感じ方の違いに気づくことができる力を引き出せるように言葉かけた。班での話し合いの時間を多くとり、様々な意見に触れられるよう配慮した。また、補助教材に出てくる主人公の気持ちを考えるために、情景描写や心情描写からわかる気持ちを考えることに重きを置いた。

- また児童アンケートにおいても、「わからないことがあれば自分で調べようとする」、「読書が好き」などの項目で成果がみられた。
- さらに、学校司書とともに全教員で、児童が学んだことを活用し、書いたり、発表したりする言語活動を取り入れた授業に向けた指導案検討を行い、授業研究を通じて、教員が単元を貫く言語活動を意識した授業づくりを行うことで、子どもが意欲的に取り組み、語彙が豊かになったり、自らわからないことを調べたり、本を読むようになったりするなどの変化があった。
- 今後も大阪府では、取石小学校を含む事業実施校において継続して研究を行い、これらの実践については府のウェブページやフォーラム等を通じて府域全体に普及するとともに、中学校においても研究を進める予定である。



資料をもとに相手にわかりやすく伝えたり紹介したりする言語活動の授業例